

主 題：明らかにされる信仰の真価

聖書箇所：コリント人への手紙第一 3章10節

霊的に幼子たちだったコリント教会のクリスチャンたちは、この世の人々がそうであるように、すべて自分が判断の基準になり、自己中心的な歩みをしていたということを見てきました。パウロは信仰において成長していなかったコリント教会の信仰者たちをとがめるだけでなく、彼らに霊的成長の大切さを改めて教えます。神の前に正しいことは何かを判断することのできない、イエス様を信じていない人々のように歩んでいる彼らに対して、正しい判断力を持って神に従う者になるようにと彼らを教えるのです。

パウロは霊的成長の大切さを畑と建物という二つの比喩をもって教えています。既に私たちはIコリント3章の学びの中で、神の畑についての学びをしてきました。パウロが種を蒔き、「アポロが水を注いだ。つまり神様がさまざまなしもべたちを使って神様の畑を耕してこられたということです。パウロがその畑に福音の種を蒔き、そしてアポロが、そのしもべたちが同じようにそこに水を撒いて、その芽が成長することを願いながら働きをしていると。言いたいことは成長することの大切さです。パウロはこの9節で「あなたがたは神の畑、神の建物」だと、二つの比喩を使うのですが、どちらも言いたいことは一つです。神の恵みによって救われたあなたたちは成長することが神に望まれているということです。そのことをこの10節以降もパウロが教えるのです。

A. パウロたちの忠実な歩み 10節

1. パウロの働き（2つの働き）

二つ目の比喩である建物についてのみことばをご一緒に見ていきたいと思います。

10節の初めに「与えられた神の恵みによって、私は賢い建築家のように、土台を据えました。」とあります。まず「土台を据え」というところを見てください。パウロはここで、コリントの町での自分たちの働きについて二つのことを挙げています。一つは土台を据えるという働き、二つ目は土台を正しく据えるという働きをしたと言います。

1) 土台を据える働き

「土台を据え」とは一体何か——。まず「土台」というのは、11節に「土台とはイエス・キリストです。」と教えています。では「土台を据え」とはどういうことかということ、これはコリント人の救いの話です。人生の土台にイエス・キリストを置いたのです。イエス・キリストを信じて、イエス・キリストの上に新しい人生が始まっている、救いのことです。パウロはこの据えたという動詞に不定過去を使っています。つまりこのコリントの人々に、もうあなたたちは救われたではないですか、もうあなたたちはキリストの土台を据えたではないですかと言っているのです。というのは、パウロはもう既にコリントでの福音宣教、開拓の働きを行ったからです。コリントの町に出かけて行って福音の種を蒔き、そしてそこにイエス・キリストを信じる者たちが興った。パウロは、キリストという土台をあなたたちは据えたと言うのです。

2) 土台を正しく据える働き

パウロのもう一つの働きは土台を正しく据えるということでした。10節に「私は賢い建築家のように」と書いてあります。パウロは自分自身のことを「賢い建築家」と呼びます。なぜ普通の建築家と言わずにそう言ったのかと言うと、彼自身が正しい土台を据えたからです。建築において最も大切なプロセスは土台、基礎工事であるということを我々は知っています。その部分をしっかりしていないと、その上にどんなすばらしい建物を建てたとしてもそれがゆがんでしまったり、崩れてしまったりするのです。日本では余り見ませんが、グアム島に住んでいる時は確かにそうでした。ある地域は砂地ですので、よっぽど深い土台を作らなければいけない。でも入札で一番安くその権利を得た業者さんはそうしなかったゆえに数年もしないうちに立派な知事公邸がゆがんでしまいました。土台がちゃんとできていなかったからです。どんなに立派な建物が建っていても、そこに住むこともできないし、そこに集うこともできない。なぜなら建物がいつ壊れてしまうかわからないからです。ですから土台がどれほど大切なのかは言うまでもない。パウロは「私は賢い建築家のように」しっかりと土台を据えたと言うのです。

パウロはどのように土台を据えたのか？

・パウロはどこでも神のおことばを正確に語った 使徒15：35

ではどうやってパウロはこの土台を据えたのでしょうか？一般の建築においても土台を据えるためには設計図どおりに手抜きしないで作らなければならないことはわかっています。パウロが言っているのは建物の話ではなくて信仰の話です。建物という比喩を使っているにすぎないのです。パウロは建築において設計図に基づいて土台を作るように、私たちも設計図——神のおことばに基づいて建てる必要があります。私はそれをなしたのだと言うのです。コリントだけではなく、どこの町に行っても彼がしたことは同じです。どこでも神のおことばを正確に語ったのです。「パウロとバルナバはアンテオケにとどまって、」宣教の拠点だったアンテオケという町に彼らはとどまって、「ほかの多くの人々とともに、主のみことばを教え、宣べ伝えた。」とあります。パウロだけではなかったのです。パウロと同じように神を愛し、神を恐れる信仰者たちがしたことは、神様のおことばを正確に伝え続けたのです。それはどの時代でも大切な、必要なことです。もし私たちが今手にしているこの書物が神のことばであるという確信を持っているならば、私たちはそのように扱います。教会において私たちが聞きたいのは、そこに立って話す人の個人的な話ではない。私たちが聞きたいのは神が何を言っておられるのか、神のメッセージが何かです。そのためには神が言おうとしておられることを正確に伝えなければいけない。それが教師の役割です。パウロは、そしてパウロたちは神のことばを正確に宣べ伝えたのです。

・パウロはどこでも神のおことばのすべてを語った 使徒20：27、コロサイ1：25

また同時に、パウロたちは神のことばを正確に語るだけではなくて、神のおことばのすべてを語ったのです。使徒20：27では「私は、神のご計画の全体を、余すところなくあなたがたに知らせておいたからです。」と、神様のご計画の一部だけを話したのではないと言っています。またコロサイ1：25でも「私は、あなたがたのために神からゆだねられた務めに従って、教会に仕える者となりました。神のことばを余すところなく伝えるためです。」と言っています。パウロは神様のことばの一部だけを語ったのではない、神が言っておられるそのすべてを語ったと言っています。それはパウロ自身が神を恐れていたからです。もし人間を恐れると、こんな話をしたら機嫌を損ねてしまうとか、こんなことをしたら彼らはもう話を聞いてくれないとか、人間的な恐れを抱いたら、その人たちが聞きたいこと、聞いていても気分を害さないことを話します。パウロたちはそんなことをしなかった。彼らは人間ではなくて神を恐れるゆえに、神が語ろうとしているメッセージをその一部ではなくすべて正確に語ったのです。パウロはこうして土台を築いたのです。このメッセージを聞いた人々は神の真理に基づいて土台を作るのです。間違ったメッセージをしたら、イエス様を信じると言ってもその信仰が正しくない可能性もあります。みことばの中にはたくさんの警告があります。イエス様を信じていると思っている未信者がいっぱいいます。だから私たちはイエス・キリストを正しく信じることが必要で、みことばに基づいて信じなければいけない。ですからパウロはしっかりと正しい土台を据えるために、真理を正確に、余すところなく人々に語ったと教えます。

パウロは愛するテモテに対して同じことをするように命じています。Ⅱテモテ2：15で「真理のみことばをまっすぐに説き明かす、恥じることのない働き人として、自分を神にささげるよう、努め励みなさい。」と言っています。この「まっすぐに説き明かす」というのは正確に教えるということです。「努め励みなさい」というのは、そのために最善を尽くしなさいということです。ですからパウロがテモテに送ったこのみことばは、神様のみことばの真理を、この聖書の真理を正確に教えることにあなたは最善を尽くしていきなさいというメッセージです。もう1カ所パウロが最後に記した遺言とも言えるⅡテモテ4章の中で2節のみことば、「みことばを宣べ伝えなさい。時が良くても悪くてもしっかりやりなさい。寛容を尽くし、絶えず教えながら、責め、戒め、また勧めなさい。」にも、「宣べ伝えなさい」とあります。これは命令形です。私たちの考えでも、知恵でも、経験でもない。私たちが伝えなければいけないことは神のおことばだと。それがパウロがテモテに対して命じたことでした。この箇所を見ると、「宣べ伝えなさい」という命令だけではなく「時が良くても悪くてもしっかりやりなさい」、この「しっかりやりなさい」というのも命令です。しかも、「責め、戒め、また勧めなさい」という三つの動詞も全部命令形です。パウロは神のみことばを正しく教え、語ることの重要性を強く指摘しています。つまり正しい土台を据えるためには、語る者の責任としてみことばの真理を正しく、すべて語らなければいけないと。人々が聞きたいと思うことだけを語るのではなく、神様の言われたことすべてを語れと。その教えによって心開かれた人たち、もちろん神がそれを用いて心を開き、彼らを救いへと導いたら、しっかりとその土台にあなたは建物を建てて行くことが必要だと。

当然パウロはコリント教会の成長を願います。でも教会の成長というのは建物の成長の話ではありません。教会というのはそこに属している我々のことです。イエス様を信じている者たちのことです。ですから教会の成長というと、教会全体の成長もあるし、それを構成しているひとりひとりの成長も当然そこには含まれるのです。どうやって個人が成長するのかというと、みことばに基づいた信仰をしっかりと持つことです。教会としては個人と同じですが、我々はしっかりとみことばの権威に従うことで

す。皆さんは少なくともそのような思いを持って歩いておられるはずで、人間に権威はありません。権威は神のことばにあるのです。神が言われたら我々はするのです。そうして個人としても群れとしても成長するのです。ですからパウロはこうして10節の初めのところに「私は賢い建築家のように、土台を据え」と、私はしっかりと神の真理を余すところなく伝えてきた。そしてそれによってあなたたちはそれを信じ、正しい土台を築くことになったと言います。

2. パウロの働き 10節

今度はパウロがその働きの力の話をしています。「与えられた神の恵みによって」と最初に出ています。「与えられた」のです、これは受け身です。自分の力でなしたのではない、その力を私は神からいただいたという話です。ですからパウロは「神の恵みによって」と言うのです。

コリント教会の問題は、人間の知恵に頼る傾向がありました。ですから人間的に見て、私はパウロがいいとか、ペテロがいいとか、キリストがいいとかと教会の中にそのような分派が存在したのです。彼らが見ていたのは神ではなくて人だからです。パウロは、こんな素晴らしい働きをした私を見ていなさいと、人々のフォーカスを自分に向けようとしていないのです。パウロは私は確かにあなたたちの町でこういう働きをしてきたけれども、実はあの働きをなさしめた力というのは私のうちにあったのではなくて、「与えられた神の恵みによって」、神のうちにあったと言うのです。あなたもご存じのように我々信仰者の力は私たちのうちにあるのではない。我々のうちにおられる神が私たちの力であると。

1) 主は、私とともに立ち、私に力を与えてくださいました。

Ⅱテモテ4：17でパウロは「しかし、主は、私とともに立ち、私に力を与えてくださいました。」と言いました。主は私とともにいつもいてくださるといことです。私とともにいつも立っていてくださる。私の横にいてくださると。そして「私に力を与えてくださいました」、私を強めてくださったと。

2) それは、私を通してみことばが余すところなく宣べ伝えられ、すべての国の人々がみことばを聞くようになるためでした。

パウロは神の力、神の助けによって働きをなしてきたことを言うのですが、その働きについてこの後「それは」と目的が続くのです。「それは、私を通してみことばが余すところなく宣べ伝えられ、すべての国の人々がみことばを聞くようになるためでした。」と。目的は二つ書かれています。

「その目的」：

① 「私を通してみことばが余すところなく宣べ伝えられ」

② 「すべての国の人々がみことばを聞くようになる」

この二つの目的を果たすために神は私に力を下さったと言っています。もう既に私たちは見てきたように、パウロは確かに神様のみことばを余すところなく、その真理のすべてを語った。その働きをなさしめてくださった、完成させてくださった、成就させてくださったのは神なのだ。そのための力を神が私に与えてくれたと言うのです。そしてすべての国の人々が聞くようになると。正しい土台を築くために、成長するために必要なのは神様の真理のみことばです。「宣べ伝える人がなくて、どうして聞くことができるでしょう。」、真理を聞くためには誰かが伝えなければいけないとローマ10：14にあるように、こんな私を通してすべての国の人々がみことばを聞くように、神様はその働きのために私を用いてくださり、その力を私に備えてくれたとパウロは言うのです。

◎ 働きの力

Ⅰコリント15：10「ところが、神の恵みによって、私は今の私になりました。」、救い話です。神様の恵みによって私は救われた。「そして、私に対するこの神の恵みは、むだにはならず、私はほかのすべての使徒たちよりも多く働きました。」、彼自身の奉仕の働き、信仰を持った後の信仰者としての歩みの話です。確かにパウロはたくさんの働きをしましたが、彼が言うのは「しかし、それは私ではなく、私にある神の恵みです。」と。パウロは自分にフォーカスが向けられることを期待してこんな話をしたのではなく、フォーカスは神に向けなければいけないと教えているのです。確かに私はこういう働きをしてきたけれども、そのすべてを可能にしたのは神なのだ。コリントの教会の人々に対して人ではなく神に目を向けなさいと教えたパウロ、そのように彼自身が生きていたことがこうしてみことばを通して明らかになります。だから人々にさまざまな働きをした。なぜならそれは人々が見ていたからです。彼らが知っていたことだからです。そこでパウロが言いたかったことは、でもあの働きのすべては私自身に生まれながらに備わっている力や知恵によってなされたのではなく、神の力によって、神がそれを可能にしてくださったということです。神の働きをなすために神は必要な力、つまり恵みをすべてのクリスチャンたちに備えてくださったのです。あえて今そう言いました。与えてくださるのではなくて、備えてくださるのではなく、もう既に備えられているのです。もし備えられていなければ、我々はそれをしっかりと求めなければいけない。神様が言われたのはあなたに必要なものはもう与えられているということです。それを用いることです。人間の知恵や力で働きをなした時に我々が期待できることは、大変限られています。なぜ

なら私たちは人を変えることもできない、もっと言えば自分を変えることもできない。でも神の恵みをいただきながら、神の働きをなす時に、私たちは神のみわざを期待できるのです。神様に働いていただかなければどうすることもできないのです。霊的に死んでいる人に対してどんなに働きかけても彼らを生かすことができないのです。どんなに強い決心をしても、神の前に忠実に歩めない私たちです。私たちに必要なのは神の助けなのです。先ほど見てきたように恵みによって救われたし、恵みによって生きているのだとパウロは知っていたのです。私を救ってくれたのも、こうして生かして用いてくれているのも全部神の恵みによって、神の御力によってなのです。我々自身がそのことをしっかりと学ぶことが必要です。私たちが誇るのは神なのです。我々が頼るのは神なのです。この方の恵みによって私たちは働きをなすことができる。パウロの働きを通して、そしてそれを神様が用いることによって、このイエス・キリストに土台を置く、本当の信仰者がコリントの町に興されました。

3. パウロの同労者たち 10節

その話をした後、パウロは「そして、ほかの人がその上に家を建てています。」と言います。土台が完成したのです。そしていよいよその上に家が建てられていくのです。パウロはこのコリントの町での自分の働きをみずからの手柄にしてはけません。コリントで働いてコリントで多くの人が救われた。それはみんな私の手柄なのではと断言していません。パウロは私が土台を据えた、その上にほかの人が家を建てたと。自分の同労者たちがその働きをしていると教えます。ご存じのように、パウロが去った後アポロが入ってきました。後にパウロはテモテを送っています。チームワークだったのです。パウロはちゃんとそのことを知っていました。ですから自分ひとりの手柄にしようとしなかった。こうしてみんなが一緒になって、働きをしているのだと言うのです。私の働きではなく、正確に言えば神の恵みによってなされた働きだと。そのために神は私のような者を使ってくれたと。

我々も同じことが言えます。あなたがこうやって生きているのは、神の恵み以外の何ものでもない。偶然この日が私たちに与えられたのではない。神が計画を持ってあなたや私にこの日を下さった。こうして生きているのも神の恵みなのです。感謝なことに、神が恵みをもって我々信仰者にこの救いを下さった。そしてそれだけではない。私たちのような者を神の栄光のために使ってくださいなのです。そのことをパウロはこの後話していくのです。

4. 各信仰者の責任 10節 主の前に価値ある人生を過ごすこと

パウロは「しかし、どのように建てるかについてはそれぞれが注意しなければなりません。」と続けます。パウロたちの働きを説明したパウロは、今度はそのフォーカスをコリントの教会のクリスチャンたちひとりひとりに向けるのです。「注意しなければなりません」という命令です。どのような教会にするのか、どのような信仰者になるのか各人に責任があると言うのです。そのためには各信仰者がそのことを真剣に考えなければいけないと。パウロは私たちはこういう働きをしてきたけれども、土台を据えたあなたたち、水を撒いてもらったあなたたちがどのように成長していくのかその責任はあなたたちにあると言うのです。

私たちが個人としても、そして群れとしても神様に喜ばれる者として成長していくためには次のことが絶対必要です。それは何のために神様が私たちに救ってくださっているのか、何のために神様が私たちを生かしてくださっているのか。何のために私たちはこうして群れとして集まっているのか、その目的をしっかりと覚えないといけない。どんな責任を神様が私たちに与えてくださったのか、責任というよりも特権と言った方がいいかもしれない。どんな祝福を神様が私たちに下さったのか。コリントのクリスチャンだけではない、時代を超えて、場所を超えてすべての信仰者に神様が下さったその特権とは何か——。それは“主イエスをこの世にあって明らかに示すこと”です。イエス様がどのようなお方であるかということをお方々の前に明らかにする、それが我々信仰者に神様が下さった特権なのです。

1) この世にあって神を明らかに示す

(1) 神を見た人がいない理由

Iヨハネ4：12を見てみたいと思います。「いまだかつて、だれも神を見た者はありません。」とあります。だれも神様を見た人はいないのです。その理由を二つ言います。

① 神は霊だから

一つ目は、神は霊だから私たちは見ることはできないのです。「ただひとり死のない方であり、近づくこともできない光の中に住まれ、人間がだれひとり見たことのない、また見ることもできない方です。」とIテモテ6：16が教えます。なぜ私たちは神様を見ることはできないか、それは神が完全であり我々が不完全だからです。私たちはここに空気が存在していることを知っています。でも見えません。電波が飛んでいることを知っています。でも見えません。つまり私たちの目というのは不完全だからです。この私たちの不完全な目が神を見ることはできないのです。

② 神は完全に聖いから：人間は生きて見ることはできない

二つ目の理由は、もし我々が神を見たとしたら、その瞬間に死ぬ、滅ぼされるのです。なぜかという
と、神は完全に聖い方です。そんな聖い方の前に私たちのように罪を負った者は立てないのです。光と
で闇は共存できないのです。完全な神の前に我々は立つことができないのです。出エジプト33：20
に「あなたはわたしの顔を見ることはできない。人はわたしを見て、なお生きていることはできないからである。」とあり
ます。だれひとりとして私たちはこの聖い神の前に立つことはできないのです。今あなたや私がこの神
の前に立つことを赦されているのは神が赦してくれたからです。それほど聖い方なのです。完全なお方
なのです。罪ある私たちが見るならば滅ぼされてしまうから、我々は神を見ることはできないのです。

2) 神を見る方法

(1) 主イエス・キリストを通して神を見る

では、人々は神を全く見るができなかったのかということそうではありません。人々は主イエス・
キリストを通して神を見てきたのです。イエス様の十二弟子のひとりピリポがイエス様にこんな質問を
します。「主よ。私たちに父を見せてください。そうすれば満足します。」、ヨハネ14：8です。イエス様はこ
う答えています。「ピリポ。こんなに長い間あなたがたといっしょにいるのに、あなたはわたしを知らなかったのです
か。わたしを見た者は、父を見たのです。どうしてあなたは、『私たちに父を見せてください。』と言うのですか。」とおもし
ろいことを言われました。「わたしを見た者は、父を見た」、つまりイエス様を見ることによって私たちは
我々を造ってくださった創造主なる神がどんなお方であるかを知ることができるというのです。

① 私たちを愛してくださる方

例えばイエス様の示してくださった愛を覚える時に、私たちは神様がどんなお方がわかるのです。
我々を造られた創造主がこの方に背を向けて生きている私たちに対して、罪を選択して神に逆らうこと
を選択して生きている私たち、永遠の滅びに至って当然の私たちに神が何をなさったか——。人として
来てくださり、あなたや私のすべての罪を負って十字架で死んでくださったのです。イエス様がなして
くださったみわざを見る時に、こんなにまでも私たちが愛して下さっている方、それがまことの神だ
ということを知ります。

② 赦しに富んだお方

そしてイエス様は私たちが赦して下さり、赦し続けて下さっている。感謝なことだと思いませ
ん？私たちが何かをしたからではない。神は一方的な恵みをもって私たちが赦して下さった。その赦
しは完全です。一度罪赦されたら永遠に赦されたのです。イエス・キリストによってその罪の汚れを聖
められたら、永遠に聖められているのです。日ごろの生活は神を悲しませることが多い私たち。でも神
は赦し続けてくださる。イエス様はあえて人々から罪人呼ばわりされていた多くの人々のところに向
いて行って彼らをお赦しになった。イエス様を見る時、私たちが造ってくださった唯一まことの神とい
うのはこういう赦しに富んだお方であることを知ります。

③ 全能なお方

御力はどうですか？イエス様が命じたら自然界でも言うことを聞いたのです。五つのパンと2匹の魚だ
けで何千人という人たちを養ったのです。こうしてイエス様を見る時に、神という方はどんなことでも
おできになるお方、全能の方だということを知ります。

④ あわれみ深いお方

また私たちに対するあわれみはどうでしょう？どうしようもない私たちがあわれんで下さってい
る。皆さん、神の前に何か自慢できることがありますか？正直に言って、多分それは自分たちの愚かさ
しかない。人と比較して、私はあの人よりこれが優れていると思うかもしれないけれども、何をして
も、神の基準には到達しないのです。我々が自慢できることは、神様、私はどうしようもないばか
です、こんなに聖書のみことばを知っていながら神に逆らい続けているし、神を信賴したらいいこともわ
かっているのに自分を信賴しているし、神がこの道を行けと言うのにその道でない道を選んでい
るし、神のみこころが最善だと知っていながら自分の考えることを選択しているし、どうしようもないばか
者ですと。でもそんな私たちがあわれんでくださったのです。すばらしい真理は、あなたや私
が自分のことを知っているその知識よりもより深層を神はご存じなのです。僕らが思っている以下の存在だと。ま
だ私たちは自分のことを本当にわかっていないのです。でも神はそのすべてをわかった上であなたをあ
われんで下さっている。神様はあなたを見ていてこんな人だとは思わなかったわ、がっかりしたわ、
失望したわと思われることはない。神様はすべてのことをご存じだからです。それでいて愛される資格
のない私たちが愛して下さり、赦される資格のない私たちが赦して下さった。あわれみを受けるに
ふさわしくない私たちがあわれんでくださった。そのイエス様がなされたみわざを見る時に、これが私
の神なのだ、神のことを知ると。

⑤ 完全に聖いお方

イエス様は完全に聖い方でした。全く罪がなかった。何度調べてもイエスの生涯に罪を見つけることができなかつた。神とは聖い方であると。

⑥ 全知のお方

そしてイエス様を見る時に、神はすべてのことをご存じだった。イエス様はあのザアカイの必要をちゃんとご存じでした。サマリヤの女の生活のすべてを知っておられたので、彼女がどうしてこの時間帯に水を汲みに来るのか知っていました。ニコデモがどうして夜になってこっそりとイエスのもとに来たのかそのすべてを知っていました。イスカリオテのユダが彼を裏切ることも知っていました。それでいて神はあのユダにもあわれみを示された。ユダが出て行くその最後まで自分の一番近いところに置いて愛を示し続けておられた。

私たちはイエス様を見る時に神を見るのです。確かに霊である神が肉体を持ってこの世に来られたのです。イエス様は完全に人間でした。だからあなたや私の苦しみも思いもそのすべてのことを理解してください。でもイエスには罪がなかった。そしてイエスは完全に神であったゆえに、その歩みは私たちに神とはどんなお方であるかを明らかに示してくださった。イエス様は自分にこれから起こることもすべて知っておられた。ヨハネ 18 : 4には「イエスは自分の身に起ころうとするすべてのことを知っておられたので、」とあります。何が起こるかを知って、それに従っていかれたのです。こうして我々はイエス様を通して神がどんなお方であるかを知ることができる。

(2) あなたを使って神を明らかにする

ではイエス様が十字架に架かり、そして葬られて三日後にその死からよみがえって後に昇天していかれた後、世の中の人たちは神を見るすべを失ってしまったのかということ、そんなことはないですよ？先ほどから見てきているように、今度は、神はあなたを使って神を明らかにされるのです。すごいことです。神が私たちを使って神ご自身を明らかにされます。先ほどの I ヨハネ 4 : 12 の実際の配列がどうなっているかと言うと、「いまだかつて、だれも神を見た者はありません。」、これを直訳すると「神、今までにだれも見た者はいない。」となり、その後「もし私たちが互いに愛し合うなら、神は私たちのうちにおられ、神の愛が私たちのうちに全うされるのです。」と条件節が続きます。これが条件になります。「もし私たちが互いに愛し合うなら」、クリスチャンたち、救いにあずかっている者たちが互いに愛し合うなら次のことがあると。コリント教会のように兄弟姉妹たちがいがみ合って、私はあの人が嫌いだとか、この人がどうだとか分派がある、そんな世俗的な神を知らない人と同じようなことをしているところには神の栄光など現れない。でももし我々クリスチャンが互いを愛し合っているならば何が起こるか——。

① 神は私たちのうちに住んでおられる：神の内住を証明する

まず一つ目は、神は私たちのうちに住んでおられる。つまりクリスチャンが互いに愛し合うことがその人たちのうちに神が内住していることを証明すると言うのです。神様が中にいるから、そのような神の愛で愛し合うことができるのです。なぜなら神の愛で愛することができるためには、それを可能にしてください。神様がいないければ愛し合うことなどできません。生まれながらに持っている愛の話ではないです。神の愛でもって互いに愛し合うという話なのです。ですから互いに愛し合っているのなら、その人のうちに神の愛が、つまり神が内住しておられる。神がその人のうちにいるということです。

② 神の愛が私たちのうちに全うされる：神がご自身を明らかにされる

二つ目の「もし私たちが互いに愛し合うなら、……神の愛が私たちのうちに全うされるのです」の「全うされる」という動詞は何か「足りないものを満たす」とか「目標や目的に到達できる」とか、「完全な状態に到達させる」とか、「完全なものにする」ということです。ということはクリスチャンたちが互いに愛し合うことによって、神ご自身の目的を神ご自身が達成なさるのだということです。では、どんな目的なのかということ、ご自身を明らかにするという目的です。驚くべき真理は私たちを一方向的に救ってくださった神様はその瞬間から働きを始めるのです。それはあなたを通して私たちの神がどんなにすばらしいお方であるかということ世に明らかにしていく働きです。

神は私たちを使ってくださるのです。だから私たちは成長していくことが必要なのです。イエス様を信じた瞬間から私たちはイエス様に似た者に変えられていきます。信仰が成長すれば、我々を通して、あなたを通してイエス様がより鮮明に見えていくのです。だから私たちはイエス様に似た者に変えられていくのです。あなたの成長がなぜ必要か、頭の中でつながりますか？あなたが成長するということはあなたがますますイエス様に似た者に変えられていくのです。イエス様に似た者に変えられれば変えられるほど、あなたを通してイエス様が明らかに示されるのです。そのために神様は私たちを救ってくださった。そのために私たちを生かしてくださっているのです。我々がキリストの愛を實踐することで、神の愛を實踐することによって、その愛を下された神を世に示していくのです。我々がキリストの赦しを實踐することで、赦しを下された神を世に明らかにしていくのです。

みことばはこう言います。「お互いに親切にし、心の優しい人となり、神がキリストにおいてあなたがたを赦してくださったように、互いに赦し合いなさい。」、エペソ4：32です。「互いに忍び合い、だれかがほかの人に不満を抱くことがあっても、互いに赦し合いなさい。主があなたがたを赦してくださったように、あなたがたもそうしなさい。」、コロサイ3：13です。我々クリスチャンというのはキリストの愛で人を愛する者であり、赦された者として赦し合う者なのです。また私たちがキリストのあわれみを実践することで、あわれみ深い神を世に明らかにしていくのです。ルカ6：36では「あなたがたの天の父があわれみ深いように、あなたがたも、あわれみ深くしなさい。」とあります。ペテロも1ペテロ3：8で「あなたがたはみな、心をつにし、同情し合い、兄弟愛を示し、あわれみ深く、謙遜でありなさい。」と言います。また私たちがキリストの聖さにおいて成長することによって聖い神がおられることを世に示していくのです。

もちろん神の属性の中で実践できない属性もあります。例えば神が全知であるように我々がすべてのことを知ることができるかというところできません。神は全能です。だから私たちもすべてのことができるのかというところできません。でもイエス様を信じた時から、私たちはイエス様に似た者になっていくのです。今見てきたように、愛においても、赦しにおいても、あわれみにおいても、イエス様に似た者に変えられることによって、そういうことを実践していく者として我々は生きることができるのです。

今、個人としても、群れとしても一体我々は何のために神様によってこの祝福をいただいたのか、どんな計画を神が私たちに対して持っておられるのか、どんなことを願っておられるのかを見てきました。あなたはイエス・キリストがどんなに素晴らしい方かを実際に見せる役割を神様からいただいた。その働きをしっかりとするためには私たちが成長していなければいけない。どんなに知識を持ったとしても、それは必ずしも成長とはつながらない。なぜなら知識においては、パリサイ人や律法学者はすごいじゃないですか。問題なのは、日々の生活で神の真理を生かしているかどうかです。神が言われることを実践しているかどうかです。そのことを何十回、何百回と言いつけるのは、それしかないからです。神のおことばを神の助けをいただきながら実践することによって我々は成長するのです。よりキリストに似た者になるのです。その時に私たちがイエス様はこんな方なのだと言われていくのです。その目的のために私たちがこの救いにあずかったのです。

2) 主の前に価値ある人生を過ごす

そこまで私たちは見てきましたが、正しい土台を据えて、イエス様を正しく受け入れたと。そしてその救いにあずかった私たちは信仰者として成長していく。その信仰者としての歩みがこの二番目の比喻では正しい土台の上に建物を築いていくという話です。ここでパウロが言うことは、みんなが建物を建てていくのだけれども、問題なのは建てることではなくて、どんな素材で建てるかです。そのことがこの後に出てくるのです。建てていないのではなのです。みんな何か建てているのです。問題は救いにあずかった人が信仰生活においてどんな素材を使いながら建てているのか——。つまり神の前に価値ある生活を送っているのか、それとも神の前に価値のない生活を送っているのか——。どちらかだからです。なぜパウロがそんなことを言うかという、必ず神の前でその真価が問われる日が来るからです。我々が信仰生活を終えて、その後眠りについてしまおうと、その後天国に行ってみんなそこで大喜びしながら神と共に生きる、確かにそうですが、救いにあずかっている我々は例外なくキリストのさばきの座に着くからです。その時に我々の信仰生活が神の前に価値あるものであったのか、そうでなかったのか明らかになるのです。その日が来るからです。

だからパウロは正しい土台にしっかりと正しい素材でもって、つまり神の前に価値ある生活を送っていきなさいと言うのです。そのような歩みをするならば、確実に結果として信仰の成長を我々は見ることができるようになります。だから私たちが考えなければいけないのは、神の前に価値ある信仰生活を私は送ってきたのかどうかです。それとも私はただ信仰にあずかった後、何となく過ごしてきたのか。少なくとも皆さんはそのことを吟味することができます。

◎そのために次のことをみずから問いかけてみてください。

- ① 私のクリスチャンとしての生活はみことばに従って生きてきたのかどうか。
- ② 私は罪から離れる生活を送ってきたのかどうか。
- ③ 例えどんな犠牲が伴おうと神が喜ばれることを選択してきたかどうか。

私が従って生きてきたのはみことばなのか、それとも自分の考えなのか。罪から離れる生活をしてきたのか、それとも罪を愛する生活をしてきたのか。例えどんな犠牲が伴おうと神が喜ばれることを選択して歩んできたのかどうか。そのことをひとりひとり自分に問いかけてみることです。

パウロはこの後、では価値ある生き方とはどういう生き方なのか、同時に価値のない生き方とはどんな生き方なのかを私たちに具体的に教えてください。残念ながらそれは次週見なければいけません。でもおひとりひとりが自分の信仰者としての歩みをしっかりと吟味してください。そして感謝なことに、神様は悔い改める機会を下さっているのです。過去はどうにもならなくても、きょうからの生活はどう

にかなるのです。神が何を望んでおられるのか、何のために生かしてくださっているのか、何のために救ってくださったのか、その目的をしっかりと覚えて、主よ、どうか私のようなどうしようもないやつですけれども、あなたが喜ばれるために使っていただきたい、あなたのすばらしさを世に証するために、その目的に沿って私を使っていただきたい、どうか神様、私を助けてあなたが喜んでくださる信仰者として信仰生活をしっかりと全うしていきたいと主の前に願いながら、この与えられた1週間を歩み続けてください。神様の栄光のために私たちは生きている。神を喜ばせることが私たちの喜びなのです。そのような歩みをあなたも私も実践できるのです。神様はそのような生活を歩んでいくことを私たちに望んでおられるのです。